



モダニズムへの振幅

笠原一人

KAZUTO KASAHARA

かさはら・かずと——京都工芸繊維大学大学院 助教／1970年生まれ。1998年、京都工芸繊維大学大学院博士課程修了。博士（学術）。

主な著書：『近代建築史』（共著、昭和堂 1998）、『関西のモダニズム建築20選』（共著、淡交社 2001）、『戦争を学ぶミュージアム／メモリアル』（共著、岩波書店 2005）、『近代日本の作家たち』（共著、学芸出版社 2006）など。

〔*1〕岡田信一郎（1883～1932）1906年、東京帝国大学卒業後、早稲田大学教授、東京美術学校教授などを歴任。他の主要作品に、鳩山一郎邸（1924）、歌舞伎座（1924）、東京府美術館（1926）など

〔*2〕保岡勝也（1868～1942）1900年、東京帝国大学卒業後、三菱合資会社地所部（現・三菱地所）勤務、技師長を務める。1913年、保岡建築事務所設立。主要な作品に、三菱8～21号館（1907～13）、岩崎家深川別邸（1909）、三菱銀行大阪支店（1911）など

〔*3〕武田五一（1872～1938）〔INAX REPORT〕No.169、2007年1月、p.4（参照）

〔*4〕ペーター・ペーレンス（1868～1940）ドイツの建築家、デザイナー。画家を目指した後、建築家となり、1907年設立のドイツ工作連盟に参加。同年、AEGの顧問となり工場や店舗、プロダクトデザインを手掛けた。ペーレンスの建築事務所には、W.グロピウス、ル・コルビュジエ、ミース・ファン・デル・ローエらが在籍していた

本野精吾

Seigo Motono

昭和の初期、様式建築から脱却し、ひたすら機能主義をラジカルに標榜し、

モダニズム建築の先駆けになった建築家…、それが本野精吾である。

本野は、昭和2年(1927)、京都で結成された「日本インターナショナル建築会」の

中心メンバーとなり、日本から世界に向けて建築のモダニズムを主張し宣言した。

時代はまさに新しい建築を模索し、世界が動いていた時期で、若きル・コルビュジエの台頭とも重なる。

本野は、明治42年(1909)から約2年間、ベルリンに留学するが、

この時期に、ヨーロッパで興っていた近代運動やアヴァンギャルドな作品に直に触れ、

大いなる刺激を受けた。それがその後の建築家としての活動を方向づけた。

建築家としての本野は寡作であった。しかし、その作品は今も生き続けている。

その空間に、当時、彼が追い求めたモダニズムの萌芽を見ることができる。

はじめに

モダニズム建築といえば、今でこそ“機能主義や合理主義の理念に基づき、無装飾の抽象的な形態を用いて、鉄やコンクリートでつくる建築”という、一定の定義やイメージがある。しかしモダニズムの黎明期にあっては、そうした定義やイメージが明確だったわけではないだろう。建築家はそれぞれにモダニズムの定義やその実現の在り方を模索していたはずで、試行錯誤の連続だったに違いない。そんな過渡期に活躍した建築家の一人として、本野精吾は位置づけられる。

本野は明治15年（1882）、本野盛亨の五男として東京に生まれた。盛亨は大蔵省に勤務した後、読売新聞社を創業した人物である。本野の兄弟も、外務大臣（一郎）や読売新聞社社長（英吉郎）、京都帝国大学教授（亨）を務めるなど活躍した。本野は、東京帝国大学建築科に学んだが、同級生には、後に「大阪市中央公会堂」（1918）や「明治生命館」（1934）などの様式建築の名作を手掛ける岡田信一郎〔*1〕らがいた。本野も、卒業制作では「INSTITUTE OF ARCHITECTS」（1906）と銘打たれたゴシック様式の作品を制作した。大学卒業後は、三菱合資会社地所部（現・三菱地所）に勤務する。保岡勝也〔*2〕の下で、「丸の内第12号館」（1910）など、やはり様式的な建築の設計に携わった。本野は同時代の他の建築家と同様、様式建築を習得することから、その活動をスタートさせたのだった。

しかし明治41年（1908）に転機が訪れる。この年、京都高等工芸学校（現・京都工芸繊維大学）図案科教授であった武田五一〔*3〕の誘いを受けて、本野は同校の教授に就任する。その翌年には、武田がかつてそうしたように、本野も“図案学研究”のためヨーロッパに留学し、明治44年（1911）まで主にベルリンに滞在していたとみられる。この留学中に本野はP.ペーレンス〔*4〕の建築作品に感銘を受け、また建築のみならず工業化を前提にしながらデザイン全般を革新していくペーレンスの活動に影響を受ける。本野はこれを機に、日本においていち早くモダニズムへと近づいていくことになる。

その後本野は、図案科教授として、建築のみならずインテリアや家具、舞台デザイン、グラフィックデザイン、服飾デザインなど、デザイン全般のさまざまな教育や活動に携わった。また生来の多趣味や原理原則を徹底しようとする性格によって、バイオリン演奏、エスペラント語、社交ダンス、南画など、さまざまなことを試みすべてを極めた。そのためもあってか、本野が生涯で残した建築作品は10点余りを数えるほどしかなく、現存するのは4作品にすぎない。建築家と呼ばれる者にしては寡作だ。だが、数少ない建築作品からも、本野の建築における思考と実践の特質が浮かび上がってくる。ここでは現存する

4つの建築作品を取り上げ、本野がモダニズムへ向かう試行錯誤の様子を考察することにしたい。

■ ■ ■

西陣織物館（現・京都市考古資料館）

本野が留学から帰国して最初に設計した建物は、「西陣織物館」（1915）である。通りに面して堂々と建つこの建物は、一見様式的で古風なものだが、そこにはモダニズムの方法が見て取れる。

建物の入り口には、円柱のある古風なポーチを備えている。しかし建物の正面の壁は、円柱や窓枠などの古典的な要素が省かれ、壁と面を合わせるように大きな窓が設置されている。そのため壁全体が白い巨大な平面のように見える。この外観は、竣工当時驚きをもって受け入れられ、人々に「マッチ箱のようだ」と形容されたというエピソードが残っている。内部の真寶室（現・会議室）には、壁紙や装飾で飾られ様式性を備えた暖炉がある。いずれも簡素なデザインであり、円や正方形といった幾何学的な形態で縁取られている。モダニズムの方法が徹底されている。

この建物の外観は、ペーレンスによって第3回ドイツ工芸展のバビリオンとして設計された「音楽堂」（1906）に似ている。本野の留学中の興奮や感動が感じられる作品だといえるが、細部に繊細なデザインを持つ独自のものにまとめられている。本野が、当時既にモダニズムの方法を使いこなしていたことがうかがえる作品である。

なお、この建物は、昭和59年（1984）に京都市登録有形文化財に登録されている。

■ ■ ■

本野精吾自邸

その後本野は、大正13年（1924）に自邸を竣工させている。ここでは、合理性を考慮して中村鎮式コンクリートブロック〔*5〕をむき出しにして用い、内部では生活動線の機能性を考慮して台所と食堂と居間をワンルームにし、建物全体をコンパクトにしている。また建物や窓の上部には、日本の風土を考慮した深い軒や庇を取り付けている。これは、後に本野らによって設立され、「様式の建設には伝統的形式に拠る事を排し狭義の国民性に固執せず真正なる『ローカリティ』に根底を置く」との文章を綱領に掲げた、「日本インターナショナル建築会」〔*6〕の方法に直結することになる。

日本では、1910年代から鉄筋コンクリート造の建物が建ち始めていた。しかしその多くは、冒頭で述べたようなモダニズム建築の条件すべてを備えていたわけではなかった。そんな中で本野邸は、同じ大正13年に東京で竣工したA.レーモンドの自邸と並んで、モダニズムのすべての条件を備えていた。日本で最初のモダニズム建築といっても差し支えないだろう。

本野が自邸でモダニズムに至った大きな要因として、竣工前年の大正12年（1923）に発生した関東大震災が挙げられる。本野は震災発生直後から、中村鎮式コンクリートブロック造で建てられた建物が震災で倒壊しなかったことに着目し、高く評価していた〔*7〕。これを機に本野と中村との協働が始まり、その最初の成果として、大正13年（1924）に「京都高等工芸学校実習室」〔*8〕が完成している。また同年中村の手によって「中村建築研究所京都出張所」〔*9〕と「古城邸」〔*10〕が、本野邸の近くに完成している。いずれも中村鎮式コンクリートブロック造であった。

中村鎮自身も数多くのコンクリートブロック造の建築を設計していたが、そのつくりはいまだ様式建築の要素を残していたし、空間のつくり方に革新性があったわけではない。その点、本野邸は、理念から形態までモダニズムを徹底したことによる革新性と、更に風土をも考慮するという独自性を兼ね備えていた。

なお、この建物は、平成15年（2003）に「DOCOMOMO Japan 100」に選ばれている。

■ ■ ■

鶴巻鶴一郎（現・栗原邸）

本野は昭和2年（1927）に「日本インターナショナル建築会」を設立し、昭和8年（1933）に活動を停止するまでの間に幾つかの建築作品を設計している。その一つが「鶴巻鶴一郎」（1929）である。京都高等工芸学校校長で染織家だった鶴巻鶴一の自邸として建てられた。本野邸と同様、中村鎮式コンクリートブロックをむき出しに用いたモダニズ



中村建築研究所京都出張所 右に本野邸が見える。窓の庇など建物の形態から見て、本野が設計した可能性がある（出典：「中村鎮遺稿」）



鶴巻鶴一郎 竣工当時の写真。窓や建物上部に庇が取り付けられているのが分かる（写真所蔵：栗原博典）

〔*5〕中村鎮式コンクリートブロック 1920年代初頭に中村鎮が考案し特許を取得した建築構法。現在のコンクリートブロックとは異なり、L字型やT字型のブロックを組み合わせて中空の壁体をつくり、そこに部分的に鉄筋コンクリートを流し込んでつくる。型枠が必要なく、工場で生産され規格化された材料を用いるため、建設の合理性が確保できる。また不燃性や耐震性にも優れた構法である

〔*5の補注〕中村 鎮（1890～1933）1914年、早稲田大学卒業後、東洋コンクリート工業技師、日本セメント工業技師長などを歴任。1921年、中村建築研究所設立。「中村式鉄筋コンクリート・ブロック構造」で特許取得。1924年、京都出張所開設。主要な作品に、大阪回生病院（1925）、佐藤功一郎（1925）、本郷基督教会（1926）、福岡教会（1928）など

〔*6〕日本インターナショナル建築会 1927年に京都で設立された建築運動団体。本野精吾、上野伊三郎、伊藤正文、中尾保、新名種夫、石本喜久治が設立メンバー。W.グロピウスやP.ペーレンス、G.Th.リートフェルト、J.ホフマンなど外国会員10人を含め、最盛期には150名以上の会員を擁しており、当時日本最大の建築運動団体だった。気候風土による“ローカリティ”を考慮した“インターナショナル建築”を目指した。1933年、会員だったB.タウトを日本に迎えると同時に、その活動を停止することになった。本野は、会の宣言、綱領の策定を主導するなど、設立時から会長格として活躍した

〔*7〕本野精吾「鉄筋混泥土ブロックと住宅」〔セメント界彙報〕1923年12月号

〔*8〕大正13年（1924）7月竣工。現在の京都大学吉田キャンパス内に立地していたとみられる。現存せず。本野と中村の協働による最初の作品

〔*9〕大正13年（1924）12月竣工。本野邸の南側に立地。現存している。本野が設計にかかわった可能性があるが不明 ▶▶図版上

〔*10〕大正13年（1924）12月竣工。中村建築研究所京都出張所の更に南に立地。現存不明。施主の古城氏とは、当時京都高等工芸学校教授だった古城鴻一。本野が設計にかかわった可能性もあるが不明



京都高等工芸学校本館 竣工当時の写真。大きな横長連続窓が目立つ（出典：『建築と社会』1931年4月号）

【*11】ウィーン分離派

1897年にウィーンでG.クリムトを中心に結成された、美術や建築など造形芸術の芸術家グループ。アーツ・アンド・クラフツ運動やアール・ヌーヴォーを引き継ぎながら、モダニズムへとつながる新しい造形運動となった

【*12】アール・デコ

1920年代から30年代にかけてヨーロッパとアメリカを中心に発展したデザイン様式。ジグザグ模様など、直線や幾何学的な形態を用いたデザインが特徴。モダンな文化の象徴として大衆の人気を博した

【*13】1927年11月に大阪三越百貨店で開催された「日本インターナショナル建築会第1回作品展覧会」に、「或る学校建築への草案」と題して出品されたもの。「デザイン」1927年12月号および「新建築」1927年12月号にも掲載された

【*14】パウハウス校舎（1926）W.グロピウス

【*14の補注】パウハウス

1919年4月にW.グロピウス（1883～1969）を初代校長として、第一次大戦直後のドイツ・ヴァイマルに創設された造形学校。1926年のデッサウ移転に伴い、グロピウスによって設計された新校舎はインターナショナルスタイルを代表する建築の一つとなる。1933年にナチスが政権を樹立した後、閉校された

【*15】この建物は、建設直前まで打放しコンクリートの仕上げになる予定だった。しかし「建設費が余ったためスクラッチタイルを張った」というエピソードが残されている

【*16】橘丸

東京湾汽船（現・東海汽船）によって発注され、三菱造船所神戸工場で製造されて1935年に竣工した客船。本野は、船体デザインと室内デザインを担当。当初、本野が考案した船体デザインは全体が流線型となっていたが、技術的な問題から、艦橋など一部に流線型が取り入れられて実現した。竣工後は東京と下田、伊豆大島を結ぶ定期航路に就航し、流線型の客船として大衆の人気を博した。戦中には病院船として活躍したが、1945年に軍隊の偽装輸送を行ない、いわゆる「橘丸事件」の舞台ともなった。戦後は再び東京と下田、伊豆大島航路に復帰。1973年に惜しまれながら引退した。船舶史の中では著名な客船であり、現在そのプラモデルも販売されている

【*17】京都家具工芸研究会

京都の老舗家具店、宮崎家具の三代目宮崎平七が、1931年に建築や家具、図案の作家らとともに設立した研究会。武田五一、本野精吾、藤井厚二、古宇田実、神坂雪佳が顧問となり、安井武雄、森田慶一、宇都宮誠太郎、東畑謙三、吉武東里、霜鳥正三郎らが委員となっていた

【*18】京都高等工芸学校図案科の教育プログラム
京都高等工芸学校図案科の教育課程が1929年に改訂されたのを受けて、本野が提示した教育プログラム。“家具工芸、室内工芸、染織工芸、商業美術、舞台芸術、文字”といった図案の各分野を、「技」、「学」、「想」という3つの視点や方法から習得し、製作を行うという本野の独自の考えが著されている

【*19】プレスアルト研究会

京都の古書店経営者、臨清吉の発案により、1937年に図案の作家らとともに設立した広告印刷物の実物を頒布する会。印刷技術の向上とデザインの発展に貢献する目的で設立され、広告印刷物の実物を多数収めた機関誌「プレスアルト」を発行するなどした。京都高等工芸学校教授だった霜鳥之彦、本野精吾、向井寛三郎が顧問となっていた

【*20】ドイツ工作連盟

1907年にミュンヘンで設立された建築家やデザイナー、企業家らが参加した団体。工業化の時代にふさわしいデザインを生み出すために企業と建築家やデザイナーの協働を目指した。1933年にナチスによって解散させられたが、1950年に再開した

【*21】ウィーン工房

1903年に建築家・J.ホフマン、およびデザイナー・K.モーザーによって設立されたデザイン工房。建築や家具、食器、工芸などを手掛けた。上野伊三郎の妻となり「日本インターナショナル建築会」の会員だったF.リックス（上野リチ）もメンバーの一人。1932年に経営難のため解散した

【*22】本野精吾「芸術の都京都」『中央美術』1922年7月号

ム建築である。そして本野邸で日本の気候風土を考慮して採用された、コンクリートによる軒や庇が、ここでも南面部分を中心に採用されている。

だが、モダニズムが徹底された本野邸に比すれば、鶴巻邸は大規模で複雑な形態を持ち、簡素なものではなくなっている。また部屋の配置は線対称に近い古風なものとなり、玄関ポーチのデザインやインテリアには、ウィーン分離派【*11】やアール・デコ【*12】など、モダニズム以前の要素が見て取れる。鶴巻の作による豪華なうけつ染めの襦袢も、建築と一体化しているが装飾的だといえる。モダニズムの深度は、本野邸よりも減じているといえるだろう。

だが、本野によってデザインされ、ほぼすべてが現存する家具とも相まって、コンクリートブロック造としては、他に類を見ない魅力的な建築作品になっている。ここでは、モダニズムの徹底よりは、中村鎮式コンクリートブロック造の造形的な可能性が追求されたと見るべきだろう。



京都高等工芸学校本館（現・京都工芸繊維大学3号館）

本野が勤務していた京都高等工芸学校は、明治35年（1902）の開校以来、現在の京都大学吉田キャンパスの敷地の一部に立地していた。しかし昭和5年（1930）に現在の松ヶ崎へ移転することになり、その際、本館が本野と文部省によって設計された。

この校舎は、その計画案が、昭和2年（1927）に開催された「日本インターナショナル建築会」の展覧会で発表されている【*13】。当時の案は、デッサウの「パウハウス校舎」（1926）【*14】にも似た、大きなガラス面を持つ打放しコンクリートによるものだった。しかし、建設に当たっては、本野のラジカルさが文部省の好みに合わなかったのか、正面の窓面が縮小された上、壁全面にスクラッチタイルが張られ、やや古風な様相を呈することになる【*15】。

しかし本野は従来、モダニズムを徹底して即物的なものにしてしまうのではなく、“感じ”や“精神性”を表現するような建築を好んでいた。しかも本館の建物は、本野が感銘を受けたベーレンスの重厚な作風に似ている。その平面計画は、学校建築としてつくられた本野の卒業制作の案にも似ている。竣工した本館の建物が、本野の意図や好みから遠いものだったわけではないだろう。



おわりに

本野の建築作品を時系列に沿って見てみると、“ある作品では特定の部分に革新的な試みをなし、次の作品では別の部分に革新的な試みをなす”といった試行錯誤に由来する、振幅のようなものが感じられる。本野は、日本において最初期にモダニズム建築を成立させたものの、その後はモダニズムを徹底させることよりも、さまざまな可能性を試みていたといえるだろう。

1930年代といえ、日本でも機能主義と合理主義に基づいた、白い箱のような典型的なモダニズム建築が建ち始めていた時期である。一方本野の1930年代の活動を見ると、木造で乾式工法に取り組んだ「乾構造小住居（緑桂山荘）」（1935）、高度な断熱性に取り組んだ「川北化学企業研究所」（1936）、流線型の船体で船舶史にも名を残す「橘丸」のデザイン（1935）【*16】、宮崎家具店と共同で立ち上げた「京都家具工芸研究会」（1931）【*17】、更には京都高等工芸学校図案科の教育プログラムの提案（1932）【*18】、広告物研究を行なう「プレスアルト研究会」【*19】の設立（1937）などが目立つ。1930年代を通じて建築作品の数は減少する一方で、活動は建築からデザイン全般へと広がり、それぞれに独自の革新的な方法を試みている。

それはちょうど、ベーレンスが中心となっていたドイツ工作連盟【*20】や、後のパウハウスの広がりにも似ている。しかし本野の場合、徹底した即物化や工業化に向かうのではなく、どちらかといえばウィーン工房【*21】にも似た、手工芸的側面を残している。それを、モダニズムの徹底に欠けると評するのは簡単だ。しかし本野自身は、それを京都という歴史的な風土を考慮して、自覚的に行っていた【*22】。

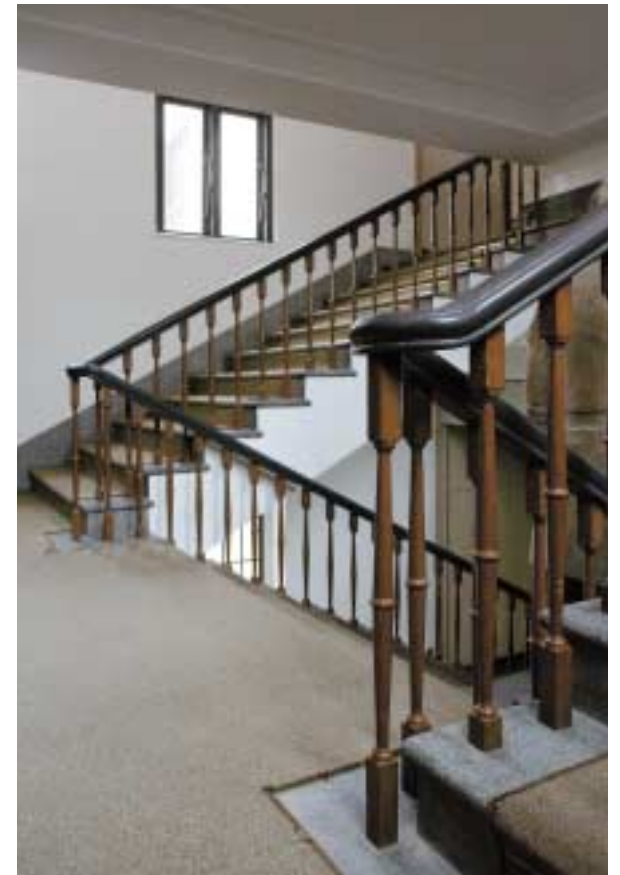
本野の活動の道程は、様式からモダニズムへの過渡期にあって、日本の京都という場所で、建築のみならずデザイン全般にわたってモダニズムを実践する際の試行錯誤と、その振幅を示している。*（図版解説も筆者）



3階貴賓室（現・会議室）天井や壁面は、様式建築的な装飾は排され、円や正方形といった幾何学的な形態で飾られている



左—正面（南面）外観 装飾が排され窓の浅い巨大な壁面や、3階隅部の枠取りがなく側面に回り込んでいる壁面のデザインなどに、モダニズムの方法が見られる
右—屋内階段 手摺子はきめ細かい繊細なデザインだが、きちんと幾何学形態が用いられている。この建物の窓サッシは大部分が竣工後に取り換えられ、デザインが変更されているが、この写真の上部に写っている窓サッシは、竣工当時のままのもの





本野精吾自邸

[建築概要]
 所在地：京都府京都市北区
 規模：地上2階
 構造：コンクリートブロック造
 竣工年：1924年

正面（東面）外観 建物は北東の角が欠き取られており、モダニズムに特有の非対称の形態となっている。だが、玄関脇の柱はレンガタイルが張られて強調されており、古典を意識したデザインとなっている



京都高等工芸学校本館 (現・京都工芸繊維大学 3号館)

[建築概要]
 所在地：京都府京都市
 左京区松ヶ崎御所海道町
 規模：地上3階
 構造：RC造
 竣工年：1930年

南面外観 南面と北面の2、3階部分は、カンチレバーを用いた横長連続窓になっている。戦後、アルミサッシの窓枠に改装された

1階エントランスホール エントランスホールの階段は左右対称の構成で重厚なものとなっている。竣工時には、階段奥に講堂があったが、現在は改装され、なくなっている



正面（東面）外観 正面玄関を備えた東面は、スクラッチタイルによる壁面が強調された重厚なデザインとなっている。1927年に発表された当初案では、この壁面も横長連続窓になる予定だった

左—1階居間および食堂 住居内の動線を小さくし機能的にするため、居間と食堂が一体化されている
 右—食堂棚 この住宅の家具もすべて本野によって設計されており、幾つかが現存している。幾何学的な形態を用いた本野らしいデザインである





左—南面玄関ポーチ 半円形に張り出した玄関ポーチ部分は、ウィーン分離派の影響を思わせるデザイン。日本の気候風土を考慮して取り付けられたと思われる上部の庇は、「日本インターナショナル建築会」の理念を反映している。帽子を被っているようなユーモラスな表情が面白い
 右—玄関ポーチ上部居室 玄関上部は居室となっている。この住宅のために本野によってデザインされた家具は、ほとんど現存している。写真の部屋の2つの椅子とその間のテーブルは、クッションも含めて竣工当時のまま

■ 鶴巻鶴一郎(現・栗原邸)

【建築概要】

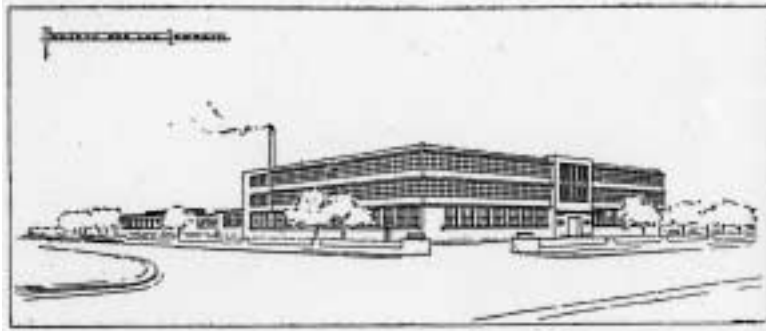
所在地：京都府京都市山科区
 規模：地上3階
 構造：コンクリートブロック造
 竣工年：1929年



北面外観 階段室の窓が階段に沿って配されており、モダニズムに特有の非対称的なデザインとなっている。暖炉などのための細い煙突が造形的なアクセントを与えていて面白い



階段 北側にある階段は木製の重厚なもの。手摺子は、そろばん玉のような幾何学の反復によるデザインで、アール・デコ風のものとなっている



1



2

1 或る学校建築への草案(後の京都高等工芸学校本館) 1927年に開催された「日本国際ナショナル建築会第1回作品展覧会」に出品されたもの。2階と3階が大きなガラス面に覆われており、テッサウの「ハウハウス校舎」を彷彿とさせるデザインとなっている(出典:「デザイン」1927年12月号)

2 京都高等工芸学校造形実習室設計図 中村鎮式コンクリートブロック造を用いて中村鎮と協働でつくった最初の建築。南面を中心に、本野邸と同様の大きな庇が取り付けられているのが確認できる(所蔵:京都工芸繊維大学美術工芸資料館 AN.4888-1)

3 書斎家具 1923年に発表された「書斎家具」と題された机と椅子。ミース・ファン・デル・ローエのデザインを彷彿とさせる。京都の老舗家具店、宮崎家具との協働による作品とみられる(写真所蔵:少林山達磨寺)

4 書斎机および椅子 どこかの住宅のために設計された家具とみられる。詳細は不明(所蔵:京都工芸繊維大学美術工芸資料館 AN.4888-7)

5 橋丸 上— 船室のデザインも本野による。モダンだが、アール・デコ風のデザインとなっている(出典:「京都高工会報」第27号)、中— 竣工後の橋丸。艦橋の3層分が丸みを帯びた流線型になっているの分かる(出典:「モデルアート 日本の客船シリーズNo.1 橋丸」、写真所蔵:東海汽船)、下— 本野による当初案。船体全体が流線型にデザインされている(出典:「京都高工会報」第27号)

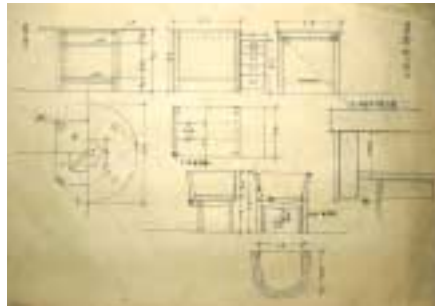
6 舞台衣装のデザイン 本野は、舞台デザインや舞台衣装も数多く手掛けている。普段身に着ける自分の洋服をデザインし製作することもあったようだ(所蔵:京都工芸繊維大学美術工芸資料館 AN.4888-30(左)、AN.4888-32(中)、AN.4888-35(右))



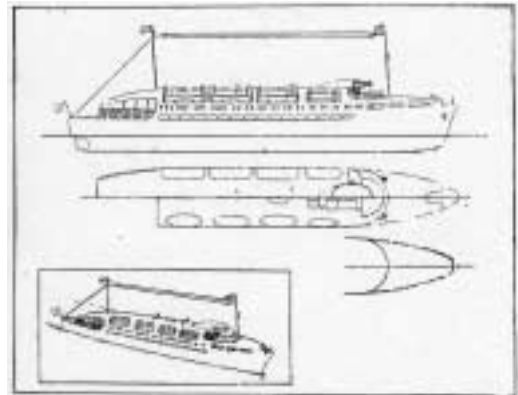
6



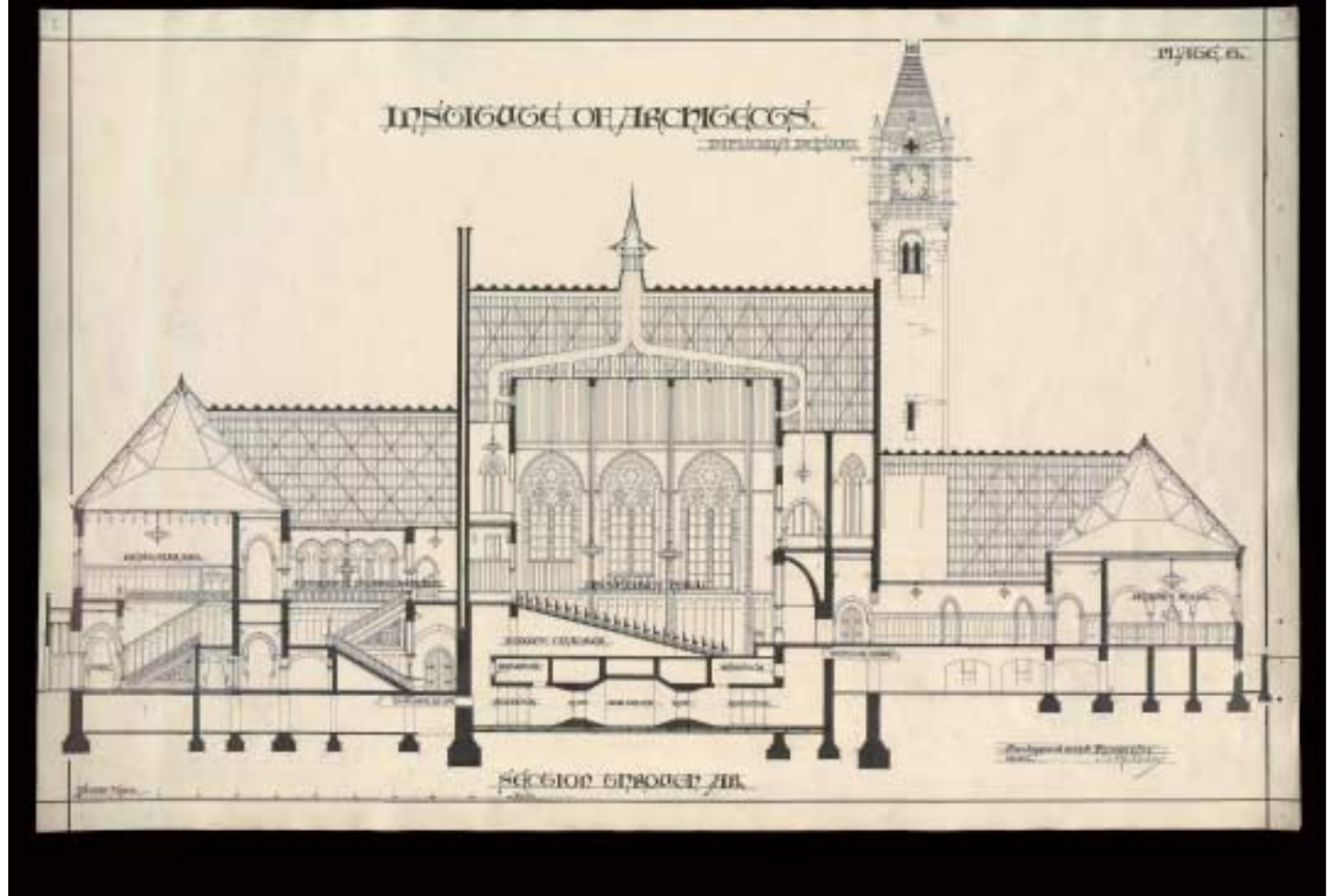
3



4



5



東京帝国大学卒業時の本野の卒業設計「INSTITUTE OF ARCHITECTS」(1906) 建物はゴシック様式だが、省略された背景のデザインには、モダンな描き方が見られる。後に本野によって設計された京都高等工芸学校本館の平面は、この卒業設計の平面に似ている

本野精吾 人と作品

1882-1944

略歴

- 1882年(明15) 9月30日、東京に生まれる
 1899年(明32) 第一高等学校入学
 1903年(明36) 第一高等学校卒業。東京帝国大学工科大学建築科入学
 1906年(明39) 東京帝国大学工科大学建築科卒業。三菱合資会社入社(保岡勝也の下で設計に携わる)
 1907年(明40) 結婚
 1908年(明41) 京都高等工芸学校図案科教授。「オキナ会」参加
 1909年(明42) 6月、図案学研究のため英独仏留学に向けて出発(主にベルリンに留学したとみられる)
 1911年(明44) 12月、帰国
 1913年(大2) 「国民美術協会」参加
 1917年(大6) 「日本建築協会」参加
 1918年(大7) 武田五一の転出に伴い、京都高等工芸学校図案科長就任
 1921年(大10) 「校会」参加
 1927年(昭2) 「日本インターナショナル建築会」設立
 1931年(昭6) 「京都家具工芸研究会」設立
 1932年(昭7) 京都高等工芸学校図案科の教育プログラム提案、「ソヴェートの友の会」参加(京都支部幹事)
 1933年(昭8) 「日本インターナショナル建築会」活動停止
 1936年(昭11) 台湾旅行(10月24日～11月7日)
 1937年(昭12) 「プレスアルト研究会」設立
 1939年(昭14) アメリカ旅行(8月6日～9月22日)
 1941年(昭16) 「新制図案家協会」設立。中国・満州・朝鮮旅行(8月12日～9月17日)
 1943年(昭18) 京都高等工芸学校教授退職。叙従三位勲二等。京都高等工芸学校講師。ゲーゼル自動車株式会社顧問
 1944年(昭19) 8月26日、京都にて逝去(61歳)



1930年3月22日「新興建築講演会」にて。左から中尾保、伊藤正文、本野精吾、新名種夫、中西六郎、佐藤武夫(出典:『建築と社会』1937年6月号)

主な作品

※印は計画のみ

- 1906年(明39) 東京帝国大学卒業制作「INSTITUTE OF ARCHITECTS」(優秀作品に選定)
 1907年(明40) 東京勧業博覧会三菱出品館(東京)(三菱合資会社(在籍時))
 1910年(明43) 丸の内第12号館(東京)(三菱合資会社(在籍時))
 1915年(大4) 西陣織物館(京都)
 1923年(大12) 新邸(不明)*
 1924年(大13) 京都高等工芸学校実習室(京都)、三木楽器音楽室(大阪)、楽器陳列所(不明)*、本野精吾自邸(京都)
 1926年(大15) こども博覧会正門・装飾デザイン(京都)
 1927年(昭2) 或る学校建築への草案(後の京都高等工芸学校本館)(京都)*、住宅(不明)*、果物店店頭の改装・ロゴマークデザイン他(不明)*
 1928年(昭3) 大阪商船株式会社「緑丸」室内意匠
 1929年(昭4) 鶴巻鶴一郎(現・栗原邸)(京都)、池田邸(京都)、大阪商船株式会社「葦丸」室内意匠
 1930年(昭5) 京都高等工芸学校本館(京都)、フルーツパーラー八百文(京都)
 1931年(昭6) フルーツパーラー八百文(京都)、自在椅子
 1932年(昭7) 書齋家具
 1933年(昭8) 書齋家具セット(京都家具工芸展覧会第4回展出品)
 1934年(昭9) 休憩イス
 1935年(昭10) 乾構造小住居(緑桂山荘)(京都)、東京湾汽船株式会社「橘丸」船体デザイン・室内意匠、安楽自在椅子
 1936年(昭11) 川北化学企業研究所(京都)、宮崎家具店1階東客間室内意匠(京都)
 1937年(昭12) 大橋廉堂邸(京都)
 1939年(昭14) 日本郵船株式会社「出雲丸」室内意匠の一部(建造中に航空母艦「飛鷹」へ変更)



左—乾構造小住居(緑桂山荘) 長男の新居として本野邸の敷地内に設計された、木造乾式構法による住宅(写真所蔵:山岸麻耶)
 右—川北化学企業研究所 乾式構法を応用し、高い断熱性や通気性を実現した実験的な建物(出典:『建築と社会』1938年8月号)

取材協力・資料・写真提供

京都市考古資料館/京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課/京都工芸繊維大学・京都工芸繊維大学 美術工芸資料館/栗原博典/少林山達磨寺/東海汽船/東京大学工学部建築学科/本野 陽/山岸麻耶 (50音順)

[次号予告]

次号(10月20日発行)の「生き続ける建築」は内田祥三です。

*特に明記のない写真は、2007年5月に新規撮影したものです。